

宮崎謙一

今から20年近く前に、当時新進のノンフィクション・ライターであった最相葉月氏による「絶対音感」という本が出版されました。発売されてからの1年間に35万部も売れるというベストセラーになったということです。この本は、世界で活躍する数多くの日本の音楽家に加えて、心理学や神経科学などのさまざまな分野の研究者に対する直接取材に基づいて書かれた優れた読み物と言えます。この本のおかげで「絶対音感」という言葉は多くの人に知られるようになり、しばらくの間は、テレビ番組などにも数多く取り上げられたりもしたのですが、だからと言って絶対音感が本当はどのようなものなのかについて多くの人が知るようになったということにはなりませんでした。

その一方で、絶対音感を持つ音楽家自身が語る生々しい体験談の方は読者に強い印象を与えたようです。たとえば、絶対音感を持つ人は日常生活で耳にするさまざまな物音までがみなドレミで聞こえるのでうるさくてしかたがないというような、絶対音感の特異な側面だけが注目されることがしばしばあります。その結果、人々の理解は、絶対音感があると苦労することもあるのかというような、どちらかという絶対音感の本質的な問題とあまり関係ないレベルにとどまっているように私には感じられます。体験を語る個人的事例は問題を発見するきっかけとしては役に立つものですが、そのような事例をいくら集めても、そこから確かな結論を導くことはできないというのが、科学的心理学にたずさわる者にとって忘れてはならない原則です。

このような絶対音感の特異な側面についての関心と並んで、絶対音感はずばらしい音楽的才能であり、音楽家にはなくてはならない能力だという見方も古くから変わらずに生き続け、今でも広く受け入れられています。そのため、子どもを持つ親たちの中には、子どもに音楽を習わせたい、できることなら絶対音感もつけさせたいと考える人たちが少なくないようです。実際、こどもたちに絶対音感を身につけさせることを看板に掲げる音楽教室が数多くあり、絶対音感をつけるための教材や本がたくさん売られているのも人々の絶対音感に対する思いの現れと言えるでしょう。

しかし絶対音感に関して一般に広く信じられている見方の多くは、さまざまな程度に憶測や誤解を含んでいて、あまり信頼できるものではありません。そこでこれらの見方を、十分な根拠がないにもかかわらず主張され、広く受け入れられている考え方という意味で「神話」と呼び、科学的な立場からそれらの神話を吟味しようとしたのが「絶対音感神話」という本です。

本書で扱っている絶対音感の問題は、さまざまに異なる立場から論じることが可能です。絶対音感とは音楽に関連する能力ですから、当然、音楽(学)の立場から、たとえば音楽のさまざまな活動にとって絶対音感はどのような意義があるのか、どのように役に立つのか(逆にどのような不都合があるか)などを論じることができます。また音楽教育の立場からは、絶対音感の訓練方法や、音楽教育の中で絶対音感を持つ意味などが問題になります。さらに生理学者や神経科学者は絶対音感の基礎にある聴覚の働きや脳の機能について、遺伝学者は絶対音感の遺伝的背景についてそれぞれ議論することでしょう。

この本を書いた私の立ち位置は認知心理学にあります。この立場から絶対音感の問題を考えることは、絶対音感が心理学的現象であることから当然とも言えるのですが、これには有利な点があります。それは、上にあげたような心理学以外の関連領域を含みながら、心理学固有の問題領域を中核にすえて絶対音感の問題を扱うことができるという点です。心と行動だけを見る伝統的

な心理学のやり方では、心理学は袋小路にはまって抜け出せなくなってしまう危険があるというのが、現在まで150年ほどの歩みの中で心理科学が到達した開かれた立場と言えるかもしれません。そのため、現在の心理科学は、神経科学との結びつきをますます強めて、新しい方向に向かっているという現状があります。

本書はこのような開かれた立ち位置から絶対音感の問題を考えています。ここで扱っているテーマは絶対音感という特殊な問題であり、副題が語っているように、絶対音感の本当の姿を知ってもらうことが本書の前景にあるねらいなのですが、実は本書を通じて、こうした心理科学の考え方、問題に向かう態度、そして心理学の実験が実際にどのように進められるのかを読者に読み取ってもらいたいというのが、本書の背景に著者がこめたねらいでもあります。

心理学というと、人の気持ちを理解したり、心の問題や悩みをかかえている人たちの助けをする仕事などを思い浮かべる人が多いのですが、そうした一般の理解とは違って、心理学を研究する心理学者は、人間の行動と心の働きを科学の立場から探求します。また心理学を学ぶ学生も、このような立場から心理学を考えていくことが求められます。

しかしこれが実はたいへんにやっかいなことなのです。と言うのも、科学の基盤は現象の観察と測定ですが、行動はともかく、心の方は直接観察することができない私的な現象であり、それを科学の立場から研究することは原理的に不可能だからです。自分自身の心ならば観察することはできるかもしれませんが、それでは個人の感想の域を出るものではなく、客観性という科学の要件を満たすことにはなりません。それに自分の心の働きは、自分自身でもわからないことが多いものです。ましてや他の人の心がどのように働いて、何を感じたり考えたりしているのかなどということがそもそも客観的に研究できるわけがないのです。

それではどうするかというと、そこが認知心理学者の腕の見せ所です。詳細は認知心理学の入門書や専門書をあたってもらうしかないのですが、それもなかなか容易なことではありません。でも、本書を読めば、絶対音感について知ることができることに加えて、心理学者の仕事の現場と道具箱の中を垣間見ることができるのではないかと思います。もちろん、それは精神分析のようなインチキ科学とはまったくちがうものなので勘違いしないようにしてください。

この本の直接のテーマである絶対音感が、まさに心理学的に研究するのが困難な問題の良い例です。というのも、絶対音感はそれを持つ人にしかわからない私的な現象だからです。私は絶対音感を研究していますが、私自身はそれを持っていません。ですから絶対音感を持つ人が音楽やその他のさまざまな音を聞く時にどのようなことを経験しているのかを知ることができません。

このようなテーマを研究するのに心理学者が行うのは、研究対象概念を操作的に定義して、それを巧妙に工夫された実験的方法を用いて探求することです。こうした研究者の言わば手の内は、もちろん専門書や論文には詳しく記述するのですが、一般読者向けの本ではごく簡単にすませるか、たいていの場合は省略してしまうものです。しかし本書ではそこを省略しませんでした。どうしても手を抜くことができなかつたのです。と言うのも、この本では多くの人々が絶対音感に関して持っている見方を覆すような議論を展開しているのですが、そのような強い主張を、どのような根拠からそう言えるのかを示すことなしに提示するだけでは、個人の意見の表明で終わってしまい、説得力が伴うはずがないからです。特に人間の心や行動の問題については、ことさらにその主張を支える確かな事実を証拠として示す必要があります。例えば、子育てや子どもの教育、犯罪や自殺、学校でのいじめなど、論議を呼ぶような社会的問題については、だれでも個人の意見や体験に基づいて語るができるでしょうが、それでは意見の言い合いになるだけで、問題の解決に近づくことにはならないことが多いものです。この本の中では、絶対音感について私の見方を展開するにあたり、私自身が行ってきた心理科学的実験の結果をたくさん盛り込みました。本書には実験結果を示すグラフもたくさん載っています。小さな本ですが、中身は相当に濃

いのではないかと自分では思っています。その反面、本書を読んで煩雑に感じてしまう読者がいるのではないかと気にしています。このような性格の本ですので、ベストセラーになることはまずないでしょうが、数は少なくとも、音楽または心理学に関心を持つ読者に読んでいただければうれしい限りです。

「自著を語る」というページなのに、この本の周辺のことばかり書いてきてしまい、肝心の本の内容には触れていませんでした。本書の主な論点は次のようなものです。

1. 絶対音感を持つ人は何ができるのか。音楽をどのように聞いているのか。
2. 絶対音感があることはどのようにして知ることができるのか。
3. 絶対音感を持つ人はどのくらいいるのか。
4. 音楽家の多くは絶対音感を持っているのか。
5. 絶対音感は音楽にとって価値があるのか。
6. 絶対音感は音痴である？
7. 絶対音感はどうすれば身につくのか。
8. 絶対音感は遺伝によるのか。

本を手にとって読んでいただきたいので、ネタバレになるようなことはあまりしない方がよいのですが、それではあんまりですから、この本で私が言おうとしていることを簡単に紹介しましょう。

絶対音感とは、他の音と比較することなしに、一つの音だけを聞いてその高さを表す音楽的音高名(C, D, E, または固定ドによるド、レ、ミなど)を即座にかつ正確に言うことができる能力のことです。この能力を持つ人はきわめて稀であるというのが定説で、音楽家や音楽学生の間でも数パーセント程度とされています。私が現在進めている絶対音感と相対音感に関する国際比較研究の結果によると、音楽専攻学生の中で絶対音感を持つ人が占める割合は、確かにヨーロッパやアメリカではきわめて少ないのですが、日本では音楽学生の大半が絶対音感を持っていることがわかってきました。おもしろいことに、中国や韓国も日本と似た状況にあります。

しかし音楽のメロディや和声は、異なる高さの音が組み合わせられてできおり、一つ一つの音の高さが何かではなく、それらの高さの間によって成り立っています。ですから、このような高さの関係を捉える能力(相対音感)が音楽的な耳に不可欠の要件であり、それがなければ音楽をやることはできません。音楽で重要なのは相対音感であり、絶対音感ではないということです。

ところが相対音感についても調べてみたところ、相対音感の能力に関して日本の音楽学生は欧米の学生にくらべてがっかりするほど劣るという結果になってしまいました。日本の音楽教育のどこかに問題があることをうかがわせる結果です。この他の多くの実験結果から、絶対音感と相対音感は拮抗する面があり、絶対音感を持つことが、音楽にとって重要な相対音感の発達を妨げる可能性があるというのが私の少々過激な見方です。絶対音感とは音楽を音として聴く能力であり、音を音楽として聞くことではないという言い方もできるかもしれませんが。優れた音楽家の中には絶対音感を持つ人が少なくないのですが、そのような音楽家でさえも、ある意味で絶対音感がハンディキャップとなっているという事実もあります。

また絶対音感とは子どものころの音楽訓練によって獲得されることは明らかです。おそらくそれには遺伝が関わっていると思いますが、この点についてはまだ確かな証拠はありません。

いかがでしょうか。おもしろそうだから読んでみようという気持ちを少しは持ってもらえたでしょうか。なお、2015年度の前期に開講されるGコード科目「音と音楽の認知心理学」では、この本で展開しているような話題を中心に講義する予定にしています。私が在職する最後の年にあたりますので、この本を使った講義を開講するのは最初で最後となります。直接話を聞きたいという人はどうぞ聴講してください。